

マイスター・エックハルトのドイツ語説教における宗教的寛容

Religious tolerance in a German sermon of Meister Eckhart

中 川 憲 次

Kenji Nakagawa

はじめに

マイスター・エックハルトのドイツ語説教の説くところは、夙に禅仏教との類似性が指摘されている。われわれは、そのような類似性の指摘に必ずしも単純に首肯するわけではないが、そのように指摘されるのにはそれなりの理由があると考えられる。

たとえば、最近では城福雅伸氏が2001年発行の京都精華大学紀要第20号所収の「仏教とキリスト教の比較——仏教における無執着とキリスト教における離脱を手がかりとして——」という論文の中で、次のように書いておられる。曰く、

「離在（離脱）だけではなく、エックハルトの思想は、苦の発生原因やその構造、さらには仏性思想に酷似するものや、そして神を悟るということに近い発想など、仏教思想に通じるものがあることがわかる。これは、信仰や宗教上の実践の徳をつきつめると西洋と東洋で酷似した思念が出現したと考えられ、つきつめた宗教や信仰の実践の徳は、一致して来るということを示唆するものである。その一方で、エックハルトが仏教の典籍を読んでいた可能性もあると考えられる。エックハルト自身が『わたくしは多くの書物を読んでみた。異教の師たちや』と述べた『異教』に仏教が入っており、この場合、エックハルトは仏教の思想の核心を把握していた可能性があり、影響を受けたか、つきつめた信仰姿勢には、離在・離脱・無執着という共通する徳が出現することを認めた可能性が極めて高いと考えられるのである。」(1)

われわれは、エックハルトの引用する「異教の師」という言葉の「異教」の中に仏教が入っているという城福氏の説には、今のところ同意することはできない。ただ、城福氏が着目したエックハルトの「異教の師」という言葉の使用には、むしろエックハルトの宗教的寛容性が伺えるのではないかと考える。

そこで、今回の論文では、エックハルトのドイツ語説教に内包された宗教的寛容性の一面を、現在読み得るか

ぎりのエックハルトのドイツ語説教の全てを対象として探りたい。そのさい、エックハルトのドイツ語説教における「異教の師」という言葉と、その異教の師の説の引用の仕方に着目したい。

1 エックハルト当時の宗教的不寛容

1.1 ペトルス・ダミアニの『書簡117 (Epistola 117)』

エックハルト当時の宗教的に不寛容な状況を示すために、ここではペトルス・ダミアニ（1007—1072）に帰せられる有名な言い回しをまず引用したい。曰く、「哲学は神学の婢（*philosophia ancilla theologiae*）」。この言い回しは、日本の思想家林達夫が1934年に書いた「スローガンとしての神学の婢」と題された論文でも取り上げられている。その論文の中で林が引用したペトルス・ダミアニの説教において、この言い回しが元々聖書の申命記21章10節から13節までの次のような言葉に由来するとされている。曰く、

「あなたが敵に向かって出陣し、あなたの神、主が敵をあなたの手に渡され、捕虜を捕らえたとき、／その中に美しい女性がいて、心引かれ、妻にしようとするならば、／自分の家に連れて行きなさい。彼女は髪を下ろし、つめを切り、／捕虜の衣服を脱いで、あなたの家に住み、自分の両親のために、一か月の間嘆かねばならない。その後、あなたは彼女のところに入ってその夫となり、彼女はあなたの妻となる。」(2)

この聖書の言葉に従って「哲学は神学の婢」という言い回しを解釈するならば、「哲学は神学によって征服され、主人となった神学に仕える婢である」ということになる。すなわち、哲学が意味を持つのは、神学という主人に仕える限りにおいてである。

そして林も引用しているのが、ここでわれわれが取り上げたいペトルス・ダミアニの『書簡117 (Epistola 117)』である。「聖なる純朴について」と副題されたこの書簡において、ペトルス・ダミアニは世俗の学問を学

び損ねたことを歎くアリブランドゥスという若者の悩みに答えて次のように言う。

「聖ベネダイクトゥスは遊学のために送り出されたが、すぐキリストの知恵ある愚かさに呼び戻された。そして学校から敬虔な畑仕事に所を移し、このことを下女の籬に書き残したが、世の知者たちが幾何学や天文学を学ぶ机でそれについて語るなどありえない。(中略)。ヒラリオンはプラトンとピユタゴラスを投げ捨て、福音のみに甘んじ、墓の洞窟の小部屋に閉じ籠った。しかし見よ、哲学者の研究が彼を飾り立てることはなくとも、彼は悪霊たちを支配する。貴君が切望したようにこの世で学んだとしたら、おそらく今は主が定めた運命の糸に貴君をつなぎとめておかれることもなかっただろう。(中略)。そこで、最愛の息子よ、貴君にもそして背信の徒や異邦人にも適するような知恵を求めようと思っはならない」(3)。

ここには林の言うところを引くなら、「すべての世俗的学問に対する不信と拒否との宣言(4)」がある。これが、1000年代のヨーロッパにおける、宗教的不寛容の実情である。

1. 2 グレゴリウス9世の『パリの神学者たちにあてた書簡 (Ab Aegyptiis)』

その後、1228年7月7日に教皇グレゴリウス9世はパリ大学の神学者たちにあてた書簡 Ab Aegyptiis を発表する。「伝統的神学用語の保存について」と副題されたその書簡に曰く、

「神学的な知性は他の知識よりも大切である。精神が肉体を支配できるように人を正しい道に向かわせるためである。(中略)。私は悲しみに沈み(創世記6・6参照)、にが草の苦味に満たされている(エレミアの哀歌3・15参照)。それは、あなたたちの中の一部の学者が、(中略)『太祖たちによって定められた』(格言の書3・15参照)ものを、不敬な新しいものに置換えようと努めているからである。彼らは自然哲学の教説に傾き、学問の進歩のためではなく、神から教えられた者、すなわち神学者ではなく、神を示す者となっているからである。天からの書、教父たちの研究、および、その他の論説によって築かれた用語を変更しようとすることは軽率であるばかりでなく、不敬でさえある。神学は、聖なる教父たちによって認められた伝統に従って解説しなければならない。(中略)。自然的理性をもって必要以上に信仰を解明しようと試みることは、信仰をある程度まで無用かつ無益にするのではないか。『人間の理性によって証明できることに関して、信仰は

不要』だからである。自然は理解できることを信じるが、信仰は知性によって信じたことがらを理解する。自然的知性によって到達できないことがらを探求することは、大胆すぎること、感心できないことである。」(5)

この書簡の言うところの要点は、「神学は、聖なる教父たちによって認められた伝統に従って解説しなければならない」ということであり、「自然的理性をもって必要以上に信仰を解明しようと試みることは、信仰をある程度まで無用かつ無益にする」ことだということであろう。こうして、ペトルス・ダミアニにその典拠が求められる有名な言い回しである「哲学は神学の婢」という言葉が、グレゴリウス9世によって決定的な形でパリ大学の神学者達に向けて語られたことになる。パリ大学の神学者たちは、もはやアリストテレスの哲学を神学の思索のために用いてはならないのであった。エックハルトが生れる40年ほど前のことであった。

しかし、パリ大学からアリストテレスの哲学に代表される世俗の学問を排除することは、大学の時代の真直中において、もはや無理な相談であった。林が引用するグレゴリウス9世の1231年4月23日の教書は、アリストテレスの思想を念頭において次のように言う。

「この異教徒の教説はまさにかの聖書の俘虜の女である。神学的精神はそれと結婚することができる。だが男が女と結婚するが如く、それを指導しそれに命令しながらでなくてはならぬ」(6)

林はこの教書の引用に続いて次のように言っている。

「かくて、『哲学は神学の婢』のグレゴリウ斯的定式においては、かつてのペトルス定式の場合と違ってその利用的観念が第一線に歩み出ていることに注意しなければならぬ。」(7)

エックハルトが生きたのは、このような「大学の時代」であった。エックハルトはパリ大学をはじめとする学びの環境を最大限に利用して、可能な限りの哲学を身につけている。エックハルトはそれを己が著作の中で引用するのであるが、その引用の仕方は果たして『「哲学は神学の婢」のグレゴリウ斯的定式』に適っていたであろうか。その先輩格のトマス・アクィナス同様エックハルトには、たとえばアリストテレスの思想の単なる利用に留まっていたとは単純に言うことができないところがあるように思われる。そして、その点にこそ、今回われわれがエックハルトの宗教的寛容性を見出すすべしがあるのである。

そこで、次にわれわれはいよいよエックハルトの説教に現れる「異教の師」という言葉について考えてみたい。

2 エックハルトのドイツ語説教における「異教の師」

エックハルトのドイツ語説教には「異教の師=ein heidenischer meister」という言葉が出てくる。われわれは今回、ヨゼフ・クヴィントによる批判的テキスト（いわゆるコールハンマー版）の内、真正性の規準第4級までに適合する説教第86番までを対象として ein heidenischer meister という言葉に逐一当たり、検討してみた。その結果分かることは、エックハルトが「異教の師」の言葉を引用しつつ、その言葉から学んでいる姿勢である。エックハルトは決して、キリスト教の優越性を示すために「異教の師」を引っ張り出しているのではないのである。そこには、異教に対する偏見は、あまり感じられない。何故なら、エックハルトは「異教の師」の言葉を引用した上で、ほとんどの場合、その言葉を否定することなく、むしろその言葉を土台として説教を展開しているのである。すなわち、エックハルトが「異教の師」を引用する仕方には、真理探求のために、キリスト教であると異教であることを問わず、全ての師から学ぼうとするエックハルトの姿勢が顕著である。

なお、ドイツ語説教以外では、これもドイツ語で書かれた論述である『神の慰めの書』と『高貴なる人』、そして『離脱について』に「異教の師」という言葉は出てくる(8)。なお、そこで「異教の師」とされているのはソクラテス、プラトン、アリストテレス、キケロ、セネカといった思想家達である。一方、ラテン語の著作には説教においても「異教の師」という言葉は出てこない。もちろん、エックハルトはラテン語著作においてもアリストテレスをはじめ、アリストテレスの注釈者であるイスラム教徒アヴェロエス等、正に異教の思想家を引用しているが、その引用においては「異教の師」という言葉を冠することなく、いきなりそれらの名前が出てくるのである。何故であろうか。思うにそれは、大学人を相手に語るのか、一般信徒を相手に語るのかの違いによるのではなかろうか。先に林の論述を引きつつ見た如く、エックハルト当時、アリストテレスをはじめとする異教の思想は大学世界で十分な市民権を得ていたのであり、わざわざ「異教の師」という言葉を冠して印象付ける必要はなかったのである。しかし、在俗の一般信徒の間では話は別である。一般信徒にとって効果的だったのは、「師(meister)」という言葉ではなかったか。だからこそエックハルトは未だ生成期間にあった中世高地ドイツ語で、そのドイツ語しか解することのできない一般大衆に説教するとき、いきなり異教の思想家を引くよりも、「異教の師」という言葉を冠して引用したのである。エックハルトは、「師(meister)」という言葉を用いることによって、大衆の心に異教の思想の権威を強く印象付けようとしたのに違いない。民衆が「師(meister)」という言葉にどのような感情を持つかを、自ら meister という言葉

をその名前に冠されていた Johannes Eckhart は、よく知っていたことだろう。最早そこには、「哲学は神学の婢」どころか、「哲学を神学のために用いる」という姿勢すらもない。むしろ、その「異教の師」の思想は、エックハルトのドイツ語説教において、キリスト教の師の思想と何ら変わらぬものとして扱われているのである。

さて、今回われわれが調べた結果、エックハルトのドイツ語説教第1番から第86番の中で、「異教の師」という言葉が出てくる説教は14ある。すなわち、説教第9番、説教第13番、説教第20番b、説教第31番、説教第36番b、説教第37番、説教第44番、説教第45番、説教第61番、説教第70番、説教第75番、説教第80番、説教第83番、そして説教第86番である(9)。その中でも、今回のわれわれの議論に最適と思われるものを二つ選んで以下で考察してみたい。なお、エックハルトがこれらの説教の中で「異教の師」として引用している人物は、プラトン、アリストテレス、キケロ、セネカ、アヴィケンナ、アヴェロエス達である。この内、アヴィケンナとアヴェロエスはイスラムの学者である。

3 エックハルトの説教における「異教の師」の評価をめぐって

3.1 「異教の師」を限定的に評価する場合

エックハルトの説教においても、「異教の師」の言葉を限定的にしか評価していない場合もある。たとえば説教第9番がそれである。

「ある異教の師によると、神を愛する魂は善性のヴェールで装って神を受け取るという。——これまで述べたものすべては異教の師の言葉で、彼らは自然の光のうちのみ知ったのである。私ははるかに高い光のうちで知る聖なる学者たちのことばには、まだ触れなかった。(Ein heidenischer meister spricht: diu sele, diu got minnet, diu nimet in under dem velle der gute—noch sint ez allez heidenischer meister wort, diu hie vor gesprochen sint, die niht enbekanten dan in einem natuerlichen liehte;noch enkam ich niht ze der heiligen meister worten, die da bekanten in einem vil hoehern liehte—)」(10)

「聖なる学者」とはキリスト教の学者のことであろう。エックハルトは「聖なる学者」の知は、「異教の師」の「自然の光のうち」での知よりも「はるかに高い光のうち」での知だというのである。ここには、「哲学は神学の婢」という定式を超え出ることのないエックハルトがいる。しかし説教第86番では、エックハルトはここから遙かに遠くへ行く。

3. 2 「異教の師」を積極的に評価する場合

「異教の師」の言葉を積極的に評価しているのは、ルカによる福音書10章38節から42節のマルタとマリアの記事をテキストにした説教第86番の第6段落である。この段落からこの説教の特徴が俄然際立ってくる。すなわち、マリアを積極的に評価するのが常であるこのテキストにおいて、エックハルトは次のようにマルタを評価し始めるのである。曰く、

「マルタがマリアを知っているのは、マリアがマルタを知っているより以上である。マルタはすでに長い間、正しく生きていたからである。生きることは最も高貴な認識を贈ってくれるのである (das Leben schenkt die edelste erkenntnis)。生きるということは、歓喜や光よりもよりよく認識するものである。生きるということは、この身体で経験できるすべてのもの、ただし神は除くが、そのすべてを真に与えてくれるのである。多くの場合、永遠の光が与えるよりも、いっそう明らかな認識を生きていくことは与えてくれる。」

このような展開の後に、いよいよ「異教の師」が登場する。曰く、

「このことは、聖パウロと異教の師たちの場合をみればよくわかることである。聖パウロは恍惚の内に神と彼自身とが霊的な仕方ですべての神の内にあるのを見た。しかしパウロは自分のうちでは、徳のどれひとつもはっきりと正確に見てとるようには認識できなかったのである。このことは彼が生活のわざにおいて徳の行いに熟達していなかったことに起因する。」

こうしてエックハルトは、キリスト教の代表的な師である聖パウロと異教の師を比較しようとするのである。その比較の結果は次の通りである。曰く、

「異教の師たちは諸徳を修練することにより非常に高い洞察に達しているのです。彼らはパウロや全ての初めて恍惚の境地に浸っている聖人よりも、はるかにはっきりと手にとるように諸徳の本質を認識できたのである。(Die meister kamen mit uebung der tugende in so hoch bekantnisse, daz sie eine iegliche tugent bildeliche naher bekanten dan Paulus oder dehein heilige in sinem ersten zucke.)」(11)

ここで、エックハルトは先に引いた説教第9番の言うところによれば、「自然の光のうちで」真理を把握しているにすぎず、「聖なる学者」の知には「はるかに」及ばないはずの「異教の師」が、パウロやキリスト教の聖人達よりも、諸徳の本質の認識に到達していると言うの

である。特にエックハルトが「異教の師」の「諸徳の修練 (uebung der tugende)」を積極的に評価している点に着目するとき、説教第9番のエックハルトの「異教の師」評価と、この説教第86番のそれとの間の違いは明白である。それは、「エックハルトにおける宗教的寛容」という観点からするならば、エックハルトの大いなる進歩だとわれわれは考える。たとえそれが、マルタとマリアの評価を逆転させるための逆説的文脈における言葉だとしても、「異教の師」の洞察に対するエックハルトの積極的評価は特筆に値しよう。

結 び

われわれは、エックハルトのドイツ語説教における「異教の師」という言葉を検討した結果、そこから何を学び取り得るであろうか。それは、すでに表題にも示した如く、「宗教的寛容」である。もちろん、エックハルトの「異教の師」との対話が示しているのは、良い意味での宗教的寛容である。キリスト教以外の文化を背景とする諸々の思想と、エックハルトが心を開いて対話したことを、エックハルトの「異教の師」の思想の引用の仕方は示していた。しかし、エックハルトは闇雲に様々の宗教思想を混合して、己が説教を構築してはいなかった。自分のキリスト教的立場を明確に自覚しているからこそ、エックハルトは「異教」の「師」と言ったのであろう。「異教」を「異教」として認識しつつ、なおそのまま、十全に尊重したのである。そのときエックハルトの宗教思想は躍進を遂げ、たとえば、目を見張るような「生きること」のこの上なき価値の発見に至ったのである。現代においても、「哲学は神学の婢」というスローガンの亡霊は闊歩している。それは、自分と異なる宗教思想を持つ人々との対話を拒否する姿勢である。その点からすれば、ここに論じ来ったドイツ語説教に示されたエックハルトの態度からわれわれが学ぶべき点があるだろう。

宗教的寛容とは、他宗教の信仰者の言葉にも心を開いて耳を傾ける態度を言うのではないだろうか。その意味で、エックハルトのドイツ語説教は、その「異教の師」の思想との対話性において、宗教的寛容性を示していたと言えよう。「はじめに」でも触れたが、われわれは、エックハルトの引用する「異教の師」という言葉の「異教」の中に仏教が入っているという城福氏の説には、今のところ同意することはできない。しかし、「異教の師」との自由な対話の結果として、エックハルトのドイツ語説教が東洋の宗教思想との類似性を指摘されるような普遍性を獲得しているということは言えるであろう。あるいは、エックハルトの「異教の師」との対話の姿勢が、城福氏をして「エックハルトが仏教の典籍を読んでいた可能性もあると考えられる」とまで言わしめたのだと考えることもできよう。実は、このような普遍性こそが、

エックハルトのドイツ語説教に内包された、真の意味での宗教的寛容性と言えるのかも知れない。

様々の宗教の立場に立つ者が、己が宗教とは違う「異教の師」の思想を「異教」として尊重しつつ、真理を目指して対話するという意味での宗教的寛容の態度を、われわれは現代においてエックハルトから学ぶことができるのではないか。

註

- 1 京都精華大学紀要20号(2000年発行)198頁
- 2 林達夫著『林達夫著作集2』、平凡社、1977年、202頁
- 3 上智大学中世思想研究所編訳/監修『中世思想原典集成7/前期スコラ学』、平凡社、1996年、37頁-41頁。引用の全体は以下の如し。「聖ベネディクトゥスは遊学のために送り出されたが、すぐキリストの知恵ある愚かさに呼び戻された。そして学校から敬虔な畑仕事に所を移し、このことを下女の飾に書き残したが、世の知者たちが幾何学や天文学を学ぶ机でそれについて語るなどありえない。(中略)。ヒラリオンはプラトンとピユタゴラスを投げ捨て、福音のみに甘んじ、墓の洞窟の小部屋に閉じ籠った。しかし見よ、哲学者の研究が彼を飾り立てることはなくとも、彼は悪霊たちを支配する。貴君が切望したようにこの世で学んだとしたら、おそらく今は主が定めた運命の糸に貴君をつなぎとめておかれることもなかっただろう。(中略)。そこで、最愛の息子よ、貴君にもそして背信の徒や異邦人にも適するような知恵を求めようと思っはならない。いったい誰が太陽を見ようとしてランプに火を灯すだろうか。誰が煌めく星の光を見るのに蠟燭を用いるだろうか。だから純粋なまなごしで神とその聖徒たちを求め人は、真の光を眺めるためによその光を必要としない。なぜなら、真の知恵自身が求める者に自らを開示し、偽りの光の助けを借りることなく、消えることのない光の輝きが姿を現すのである。[知恵は輝かしく、朽ちることがない。知恵を愛する人には進んで自分を表現し、探す人には自分を示す。求める人には自分の方から姿を見せる][知6.223]と書かれている通りである。それゆえ、この知恵を求めなさい。心の底から熱烈にその知恵を抱きなさい。貴君がそれをただ味わうだけでなく、それによって生き、それを通して終わりなく喜ぶことができるように。」
- 4 林達夫著『林達夫著作集2』、平凡社、1977年、207頁
- 5 H・デンツィンガー編 A・シェーンメッツァー増補改訂浜寛五郎訳『カトリック教会文書資料集信経および信仰と道徳に関する定義集、改訂4版』エンゲルレ書店、1992年、824頁。引用の全体は以下の如し。「神学的な知性は他の知識よりも大切である。精神が肉体を支配できるように人を正しい道に向わせるためである。(中略)。私は悲しみに沈み(創世記6・6参照)、にが草の苦味に満たされている(エレミアの哀歌3・15参照)。それは、あなたたちの中の一部の学者が、(中略)『太祖たちによって定められた』(格言の書3・15参照)ものを、不敬な新しいものに置換えようと努めているからである。彼らは自然哲学の教説に傾き、学問の進歩のためではなく、神から教えられた者、すなわち神学者ではなく、神を示す者となっているからである。天からの書、教父たちの研究、および、その他の論説によって築かれた用語を変更しようとすることは軽率であるばかりでなく、不敬でさえある。神学は、聖なる教父たちによって認められた伝統に従って解説しなければならない。さらに、肉の武器によってではなく、『神の知恵に逆らって立てられたすべての障害物を打ちこわし、すべての思いをとりこにしてキリストに服従させる』(2コリント10・4~5)神の力によって解説されなければならない。さ

まざま違った教えによって迷わされた者は(ヘブライ13・9)、頭を尾にしてしまい(申命記28・13、44)、女王を下女に仕えさせる。すなわち、天上の教えを地上の教えに奉仕させ、恩恵を自然に奉仕させる。事実、彼らは、自然のことがらの知識に重点を置き、この世の『弱くて不完全な要素』に逆戻りして、またもや、その奴隷になり(ガラテア4・9参照)、キリストにおいて愚か者となって『堅い食物ではなく、乳』(ヘブライ5・12~13)によって養われようとしている。さらに、彼らの心は恩恵によって堅められているとは決して思われぬ(ヘブライ13・9)。したがって、『超自然的たまものを失い、自然的能力も傷ついていること』、また、次の使徒のことも忘れてしまっている。『俗悪なむだ話と偽りの知識の論争をさけよ、ある人々はそれに執心して信仰の道からまよった』(1テモテ6・20~21)。(中略)。自然的理性をもって必要以上に信仰を解明しようと試みることは、信仰をある程度まで無用かつ無益にするのではないか。『人間の理性によって証明できることに関して、信仰は不要』だからである。自然は理解できることを信じるが、信仰は知性によって信じることがらを理解する。自然的知性によって到達できないことがらを探求することは、大胆すぎることに、感心できないことである。』

- 6 林達夫著『林達夫著作集2』、平凡社、1977年、218頁
- 7 林達夫著『林達夫著作集2』、平凡社、1977年、218頁
- 8 Meister Eckhart, Deutsche Werke. Band V., W. Kohlhammer Verlag, 1987, S. 15, 20, 59, 60, 111, 115, 400
- 9 Meister Eckhart, Deutsche Werke. Band I-III., W. Kohlhammer Verlag, 1986-1996, S. 15, 20, 59, 60, 111, 115, 400. なお、本文に引用しなかった説教の言葉を以下に邦訳のみで記しておく。全て、「異教の師」を限定的に評価する言葉である。
- ドイツ語説教第13番「異教の師たちによれば、神は被造物を、常にあるものが他のものの上にあるように、最上位のものが最下位のものに、最下位のものが最上位のものに触れるように秩序づけたという。この学者が述べたことを、他の師がはっきりと述べ、・・・」。
- ドイツ語説教第13番「ある異教の師は被造物を神と比べている。・・・。聖書によれば、私達は神に似ていなければならないという。ところで単なる自然の理解によってこの認識に達した異教の師は『神は神でないことが耐えられないように、似ていることに耐えられない』といている」。
- ドイツ語説教第20番(b)「異教の学者によると、神についてはその存在の高貴さと純粋性のために、いかなる舌をもってしても、適切に言い表すことはできないという」。
- ドイツ語説教第83番「ある異教の師によると、私たちが第一原因について理解したり、話したりすることは、それは第一原因というより私たち自身のものである」。
- ドイツ語説教第36番(b)「異教の師プラトンは言っている。『魂には全ての知が自然に備わっている』と」。
- ドイツ語説教第37番「魂の二つの顔について、アウグスティヌスと共に他の異教の師も語っている」。
- ドイツ語説教第37番「さて、ある異教の師は言っている。『魂はこの、霊的に全てのものになるという力を持っている』」。
- ドイツ語説教第44番「ある異教の師は言っている。『古びることのない時間というものが存在する。そこには、歪むことなく、常に幸いなる生命が存在する。そこでは、なにものも覆われることなく、そこには純粋な存在が有る』」。
- ドイツ語説教第45番「さて、ある異教の師が言っている。『もし人が徳の行為を何か他のもののために為すなら、その時、その徳は真の徳にはならない』」。
- ドイツ語説教第70番「異教の師ですら、世界と時間は少しであるという」。
- ドイツ語説教第75番「これは往々、異教徒に見られることだが、彼らは自然的認識によってこの愛に満ちた平安に達して

いる。なぜなら、ある異教の師は『人間は生まれながら温和な動物である』といているからである」。

○ドイツ語説教第80番「異教の学者は、第一原因が他の第二原因に注ぎ込むのは、他の原因がその結果に自分を注ぎ込むよりもはるかに多い、と言っている」。

10 Meister.Eckhart, Deutsche Werke. Band I., W. Kohlhammer Verlag, 1986, S. 152

11 Meister.Eckhart, Deutsche Werke. Band III., W. Kohlhammer Verlag, 1996, S. 483

(本稿は2003年9月13日から14日にかけて関西学院大学で開催された「キリスト教史学会第54回大会」における研究発表の原稿に加筆したものである。)